

国

列車のコンパートメントに乗るといのは、ときに思いがけない会話の愉しみをもたらしてくれるものだ。

昔、イタリアに留学していたころ、ミラノからの夜汽車のなかでわたしは、ソマリア人の3人の女性たちと同室になった。彼女たちの派手な化粧と強い香水の匂いに最初は驚きもしたが、やがてわたしたちは打ち解けて話し合うようになった。原因は部屋に迷いこんできた一匹の蚊で、協力してこいつを始末しないことには誰も安眠ができないことがわかったからである。

つい最近、ボスニアからクロアチアへと抜ける10時間あまりの汽車の時間を、わたしはたまたま韓国人の留学生と話しながらすし

た。彼女はロンドンのフィルムスクールに通いだしたばかりの学生で、いずれは映画監督をめざしたいとはつきりといった。それでもう少し突っ込んで尋ねてみると、彼女が光州の出身であることがわかった。1980年に民主化を訴えて武装した市民たちに対して政府軍が徹底した弾圧を行ない、数千人が虐殺されたという全羅南道の都市のことである。

わたしの最初の記憶は、両親に連れられて民主化のデモにいったときのことで、彼女は叫んでいた。「とてもたくさん人がいて、大声で叫んでいて、そのことしか覚えてはいないんですが」。

どうしてボスニアなど旅行しようと思ったのかと、わたしは尋ねた。高校生のとき、ある雑誌で、「マドリッド、光州、サラエヴォ」

と、三つの都市が並べて論じられている文章をたまたま読んで、いつか行ってみたいと決めていたからですと、彼女は端的に答えた。それはわたしにも理解ができた。いずれもが20世紀にあつて外部から軍事的に侵略され、民主主義を標榜する住民たちが団結して抵抗

コンパートメントの会話

し、籠城を続けたことで記憶されている都市だからだ。わたしはその答えのあまりの端的さに、たのもしいものを認めたような印象もった。

わたしはいつか、彼女の名前を国際映画祭のプログラムに見ることがあるだろうか。☺

よもたいぬひこ
四方田彦

明治学院大学教授

をちこち散歩

@Sarajevo